

## 額田王の三輪山悲歌

福 沢 武 一

額田王，近江国に下りし時，作れる歌，井戸王すなはち和ふる歌

味酒三輪の山 あをによし奈良の山の 山の際にい隠るまで 道の隈い積るまでに つばらにも見つつゆかむを しばしばも見放けむ山を 情なく雲の 隠さふべしや (17歌)

反歌

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや (18歌)

右の二首の歌は，山上憶良大夫の類聚歌林にはく，「都を近江国に遷す時に三輪山を御覧す御歌なり」といふ。日本書紀にはく，「六年丙寅の春三月，辛酉の朔の己卯，都を近江に遷す」といふ。

緑麻形の林のさきのさ野榛の衣につくなす目につくわが背 (19歌)

右の一首の歌は，今案ふるに，和ふる歌に似ず。ただし旧本にこの次に載す。この故に猶し載す。

### 1

長歌の冒頭のウマサケは三輪の枕詞。「三輪の山」は下への続きが様々にとられています。次に概略を示しましょう。

三輪山を(「見つつ」の目的語) 代匠記・略解・注疏・美夫君志・全釈・山田氏講義・佐々木氏評釈・窪田氏評釈。

三輪山が(「い隠る」の主格) 井上氏新考・豊田氏新釈・橋田氏女流歌人歌集・次田氏新講旧版・小学館本。

三輪山よ(呼び掛け) 古義・左千夫新釈・佐々木氏選釈・武田氏(総釈・新解・総合研究・全注釈)・新講新版・次田真幸氏(評説・評釈)・私注・大系……。

三輪山は 正訓・精考・金子氏評釈・森脇氏解釈と鑑賞・佐伯氏評解。

三輪山も 折口氏口訳

三輪山と(奈良山が) 土岐氏歌話

「三輪山よ」を通解といいようです。それに不審を懐きます。ここで三輪山に呼び掛けても妙なものです。心をこめて三輪山を歌ってはいますが，他称，第三人称というべきです。

「三輪山が」は，一番近い「い隠る」へつらなっていく点，平明です。しかし，一歌の重点は，ずっと下の方，「見つつゆかむを」にあります。「あをによし」から「い積るまでに」までは，いわば括弧にくくっていいのです。

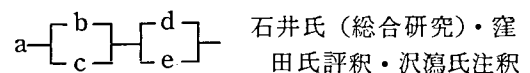
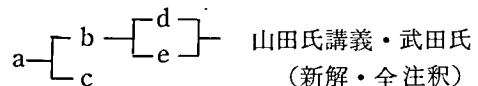
では「三輪山を」を選ぶべきでしょうか？

ここにも疑問がはさまれます。

考察を進めるため，一歌の構成を図示することになります。

- a あをによし奈良の山の
- b 山の間にい隠るまで
- c 道の隈い積るまでに
- d つばらにも見つつゆかむを
- e しばしばも見放けむ山を

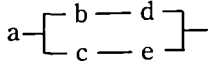
bc・de がそれぞれ対をなしています。その前後の関係は次のようにとられているのです。



「山の際にい隠るまで」は，最後の見をさめまでで，「道の隈い積るまで」は，遠く行き行くまでで，順序が前後してゐるが，これは「い隠る」を主として，感を強める為に繰返

しとして云ったもので、謡ひ物の系統の歌としては自然といはなければならない。(窪田氏評釈) 沢瀉氏注釈, 同解

謡ひ物とは心外です。順序も前後などしていません。次のような構成だったのです。



次の例を見れば思い半はに過ぎるはずです。

……寄り寝し妹を 露霜の置きてしてくれば  
c'この道の八十隈ごとに e'よろづたび  
顧みすれど いや遠に里はさかりぬ……

(131, 138 人麿)

c'e'はceの結合を実証しています。bdが結合するのは自然の勢いです。

ところで、deの対句は、

「みつつゆかむ山を」といふべきを、言余れば下なる「みさけむ山を」に譲りて「やま」といふ語を略したるなり。(井上氏新考) ①

そうまでいうことはありますまい。「見つつゆかむを」は、「見ながらゆきたいのに」の意。従って、対をなす「見放けむ山を」は「遠く見やりたい山なのに」の意でなければなりません。②

「を」は前の句の「を」と同じく、「なるものを」の意であると共に、下の「隠さふ」の客語を示す意をもかねてある。(沢瀉氏注釈)

これは親切なようで、実は当たりません。なぜなら、「山を」(山であるのに)に注目してください。この句の主格は、——冒頭の1, 2句がそれではなかったでしょうか?③

## 2

前項で到達したところを別の面から検討したいと思います。

主語につく「の」「が」は主として句(従属文)に用いられるとは誰もいふ所である……。 (万葉語研究 2 べ)

このように前置きして、佐伯氏は集中の用例を逐一検証しました。それが一段落したところで次のように述べています。

例外の多い言語現象のことであるから、ここにも例外はあるけれども、その数は極めて少ない。(10 べ)

その数少ない例の一つに主題歌の「雲の」を挙げ

ています。「雲は」とあるべきところだと考えたのです。

はたして「雲の」は例外でしょうか。

……国原は煙立ちたつ 海原はかまめ立ちたつ…… (2 舒明天皇)

ここでは「煙が」「かまめが」と補って受けとられます。それらを包む大きい文主「国原は」「海原は」があるためです。

……青きをばおきてそ嘆く そこし恨めし  
秋山われは (16 額田王)

この場合は次のように補言していいはずで

そこ(が)(われは)恨めしい。秋山(が)われは(懐しい)。④

主題歌の「雲の」をこれらと同等に考えます。「雲の隠さふべしや」を包む大きい文主があるのです。ほかでもない、それが冒頭の「味酒三輪の山」だと思ふのです。

次のような声が聞こえないではありません。

——例示された「国原は」「海原は」は文主ではないし、「そこし」「秋山」は「が」を補おうが、補うまいが、主格ではなくて、いわば目的格なのだ、と。

敢えて否定しません。次の場合を類例と考えます。

大和恋ひの寝らえぬに情なくこの渚の崎に  
鶴鳴くべしや (71 忍坂部乙麿)

諸注例外なく「鶴が鳴くべきであろうか」と訳文を与えています。本文が「鶴が」の使いざまであることを証しているのです。それを包む「今宵は」などの存在が条件になっています。その「今宵は」を文主だと強弁はしません。それは一文の主題のありかを指示しています。なにではない、こうしたやりきれない夜、だったのです。主題のあるところに、——主語の場合、時や所の場合、事柄についても、主題の所在を示唆する働きが「は」にあるのです。主題でない主語が「が」「の」を伴うことはいうまでもありません。

主題歌の「雲の」は、それ以外に主題があることを明証しています。冒頭の「味酒三輪の山(は)」が大映しになって当然です。一歌の主題が最初にドカンとすえられたのです。それが作者の意図だったのです。それは「見放けむ山」の主語・主題であるだけでなく、「見つつゆかむを」の主題でもあります。全体にも、細部にも、主題は浸透し

ているのです。

反歌になりますと、がらりと変わります。初句に「三輪山を」とおきました。主題が他に移った証拠です。五句の「隠さふべしや」は、長歌の結句と全く一致しますが、ずれています。反歌では次のようであるはずで。

(雲は三輪山を) 隠さふべしや。

反歌は、一見、長歌の単なる反復にみえます。実は大きく変化しています。心の焦点が移っているのです。しかも二歌に同一の血が脈々と流れています。同じ心臓の鼓動を伝えて高鳴っています。

### 3

19歌では、まず初句が問題になります。可能性のある訓は次のようです。

ソマカタノ 旧訓・仙覚抄・拾穂抄・代匠記初稿本。

ヘソカタノ 代匠記精撰本・古義・井上氏新考……

ミワヤマノ 僻案抄・考・略解・檜の柚・燈・攷証・美夫君志・国歌大観・注疏・折口氏(口訳・辞典)・豊田氏新釈・伊丹氏難訓考・松田氏作者と作品・山本氏万葉読本。

ヘソカタノが通訓です。ヘソは、つむぎ糸を巻いたものです。古辞書によると、

卷子 閉蘇。今案ふるに、本文いまだ詳かならず。但し、閭巷伝ふる所は、麻を績みし円巻の名なり。(倭名抄) 原漢文

そのヘソをとって地名としたヘソアガタが原形といわれます。実証的な裏づけには欠けています。

ミワヤマノは三輪山伝説に由来しています。崇神記から書き写します。

活玉依毘売、その容姿端正しかりき。ここに壯夫ありて、その形姿威儀とときに比なきが、夜半の時にたちまち来つ。かれ、あひ感でて共婚ひして共住める間に、いまだいくだもあらねば、その美人はらみぬ。ここに父母そのはらみし事を怪しみて、その女に問ひていひけらく、「なは自らはらみぬ。夫なきにいかにかはらめる」といへば、答へていひけらく、「麗しき壯夫ありて、その姓名も知らぬが、夕ごとに来たりて共住める間に自らはらみぬ」といひき。ここをもちてその父母、その

人を知らむと欲ひて、その女に教へていひけらく、「赤土を床の前に散らし、閉蘇紡麻針に貫きて、その衣の襦に刺せ」といひき。かれ、教へのごとくして朝に見れば、針つけし麻は戸の鉤穴よりひき通りて出でて、ただ遺れる麻は三勾のみなりき。ここに即ち鉤穴より出でし状を知りて、糸のまにまに尋ねゆけば美和山に至りて神の社にとどまりき。かれ、その神の子とは知りぬ。かれ、その麻の三勾遺りしによりて、その地を名づけて美和といふなり。

これが周知の伝説だとはいえ、次のように論拠づけるのは飛躍がすぎます。

綜麻の二字をみわとはよめるなり。(攷証)

綜麻の麻糸が三巻き遺っていたからこそミワといえたのであって、「綜麻」即ミワではないのです。攷証はさらに続けます。

それに形の字を附したるは、形の字をやまとよむべき為也。いかにぞなれば、綜麻の形は円かなるものなれば、形の字をやまとはよむ也。

「綜麻の形」なら「円か」ともいえましようが、「綜麻」を「円か」、「形」一字を「山」と言えるものではありません。

ミワヤマ訓に新たな見解を示したのは折口氏です。

所謂紡錘状の山で、綜麻形と書いたのは当ってゐる。(同氏万葉集辞典)

義訓に、綜麻形と書いたのは、此山今でも綜麻の紡錘の様に、山の尾長く引いて磯城平野の初瀬河内の入口に延びてゐる処から、当時の人、綜麻形といへば、三輪山を思ひ浮べたであらう。(同書補)

ツムは糸を巻く心棒です。これに竹の細い管を通し、糸車で回転させて糸を巻きとらせませす。巻きとるほどに膨らみます。それがヘソ(綜麻)です。その形状が紡錘形です。「紡錘」は本来ツムですし、ツムはとがっています。どうもヘソとツムを混同しているらしい。19歌の綜麻形は即紡錘形と考えていい。その山容から「三輪山」の義訓が導かれるのは自然です。

三輪山が綜麻形をなせりといふことは古の伝説にもなく、又今見てもしか見えざるのみ

ならず……。(山田氏講義)⑤

そんなことはありません。三輪山は実に見事な紡錘形です。ぷっくり膨らんだヘソの縦半分だから拋物線を描いているのです。

美しい三輪の山容を「綜麻」に例へてみよう。僻案抄以来引かれて来た古事記の三輪山伝説も必要ではない。「綜麻形の三輪山」といふ語から、或は意から、綜麻形をただちにミワヤマと訓ませようとしたのではあるまいか。(松田氏作者と作品)

いきつくべきところへいきついた気がします。なお、「綜麻形」は成語で、地名か、とする説が佐竹昭広氏から出されています。沢瀉氏の一文から孫引きします。

ヘソカタも三輪の地名だったかも知れない。「<sup>おも</sup>按ふに、此は三輪山の古への異なるべきか」と古義に云ってゐるのも再考に値するかも知れない。「これらは偏に今後のヘソカタの宿題である」と述べて、それ以上訓詁の問題には及ばれてゐないが、更に一步を進めて、「綜麻形(条)」をやがて三輪山の表記として用ゐるに至ったと考へられないであらうか。「<sup>とよとり</sup>飛鳥」を明日香、「<sup>はるひ</sup>春日」をカサガの表記とするに至ったと同じやうに。(注釈)

成語の仮説をまつまでもないと思います。いづれにせよ、三輪山の山容がヘソに似ていることを根本におかなければ始まらなかったのです。

17・18歌は同一人の——額田王その人の、作品に相違ありません。それに和したのは井戸王の19歌です。17・18歌が「三輪山」をもって歌い始めています。19歌の初句を「三輪山の」と訓むならば、和歌らしさをいかほどか獲得します。

左注にいへる如く和歌とはおもはれず。されど<sup>みわやま</sup>綜麻形とよみたるゆゑに上の三輪山と同類とこころえてここに載せたるものなるべし。(注疏)

似ているだけではない。まがいもなく和歌です。その意味でミワヤマの訓は尊重されるべきです。

19の歌は、額田王が実に烈しく「三輪山」を歌っている17・18の歌に「即ち和ふる歌」であるから、集中の多くの唱和歌を見ても、17・18のことばと同じことばが用いられている確率が大きいはずであるのに、ソマカタ

ノ・ヘソカタノ・ヲチカタノ(荷田御風)と訓むならば全然、存在しないことになってしまい、異例といわねばならない。この点から考えるに、ミワヤマノと訓めるならばきわめて自然である。(伊丹氏難訓考)

三輪山の林のさきの……とすれば、17・18歌との関連もよみがへり、すなほに読解が出来るのである。「綜麻形」は18歌「三輪山」の替字でもあらうか。(松田氏前掲書)  
念のため訳文を与えておきます。

三輪山の林の外縁に生えている榛の木がよく衣服に染みつくように、ひどく目につくといしいお方よ。

#### 4

右の三首の作者程諸注に異説の多いものはない。(万葉歌人の誕生)

このように前置きし、沢瀉氏は諸説を列挙しました。ここでは松田氏が追加改稿したところから従って略記します。

- (1) 17・18 額田王 19 井戸王 (和) 仙覚抄・拾穂抄・代匠記精撰本・僻案抄・古義・左千夫新釈・正訓・佳調・武田氏(新解・総釈・全注釈)・佐々木氏評釈・私注・土岐氏歌話・森脇氏解釈と鑑賞・谷氏額田王・伊丹氏難訓考
- (2) 17・18 大海人 19 額田王 (和) 考・略解・長井氏評釈
- (3) 17・18 額田王 19 額田王 (別) 檜の柚・金子氏評釈
- (4) 17・18 井戸王 19 額田王 (和) 燈・美夫君志・折口氏口訳
- (5) 17・18・19 井戸王 (和) 攷証
- (6) 17・18 大海人 19 額田王 (別) 墨縄・檜栂・野雁新考・私考
- (7) 17・18 額田王 19 不明 (別) 注疏・井上氏新考・次田氏新講・評説・窪田氏評釈
- (8) 17・18・19 額田王 豊田氏(新釈・通釈)
- (9) 17 額田王 18 井戸王 19 不明(別) 精考
- (10) 17・18 天智天皇 19 額田王 沢瀉氏(歌人の誕生・注釈)・佐伯氏評解
- (11) 17 額田王 18・19 井戸王 (和) 松田氏新見と実証
- (12) 17 天智天皇 18 額田王 19 井戸王 山口

氏修辞の研究

(13) 17 額田王 18 井戸王 (和) 額田王 松田氏  
作者と作品

18 歌は長歌 17 に付随する反歌であって、歌柄からしても異口同音とはいえません。前にも一言した通り、同じ心情が両歌に沸騰しているのです。別々の作者に帰するなどとは、作品の声を無視したものであるべきです。(9)・(11)・(12)・(13)はまっ先に捨てられて当然です。

次に題詞を認めるか認めないかで大別されます。前者に従えば次のごとくなります。

此題、傍例に違へり。此には額田王下近江国時作歌一首并短歌と題して、綜麻形の歌の処に井戸王即和歌一首とありぬべき事なり。

古記のまま歟。(代匠記精撰本)

これに従って、諸注のうち(1)をどれよりも尊重すべきです。それが軽視され、否定された理由——結果からみることですが、それには次の3点が指摘できます。

- (一) 題詞を軽視する風潮がある。そこから混迷が始まった。
- (二) 17・18 歌の真意をうかがう明に欠けていた。
- (三) 19 歌が示唆するところに耳をかそうとしなかった。

三歌の真意がいささか難解なことは確かです。しかし解明不可能とは限りません。怠惰な独断を自戒すべきです。

この歌詞を否定すべき決定的な論拠はない……。(沢瀉氏歌人の誕生 38 べ)

そのとき、否定の立場で論を進めるべきではありません。その前になすべきことがあります。題詞に従って主題三歌の理解に徹することです。もっと正しくは、作品そのものに聞くことです。しかもなお題詞が認めかねた時、つまり先の(1)がまともに否定された時、はじめて左注を顧慮することが認容されます。その意味で、(2)以下の諸説は一番最後に関説されればいいのです。

先に題詞を否定する論拠を見出さなかった沢瀉氏が次のように言葉をつぎました。

題詞に不審の点が濃厚とすれば、左注を否定すべき論の見出されない限り……歌林の説に従ふべきが自然ではなからうか。(同上書)

不安を払拭しかねます。歌林の説(左注)が怠惰な独断でない保証はどこにもないのです。

5

だれとて 17・18 歌の気迫に驚かされます。三輪山を歌っていますが、いかなる対人的な歌よりも激しています。次のように信ずることはほとんど不可能です。

——この作品は三輪山そのものへの惜別を歌っている。

これに対し、次のように三輪山に「ふるさと」を認めるのが古義以来の通解です。

——三輪山は住みなれた大和の象徴だ。大和で日ごろ眺めていたのが三輪山だったから。

それにしても二歌の惜別は烈しすぎます。もっと深く愛憎にかかわるものが他に想定されて当然です。いや、想定せねばうそです。なにを想定すべきか? それを一番先に、一番適確に、一番格調高く伊藤左千夫が解明してくれています。⑥

愈大津の都へ召寄せらるる事になって、奈良を出づるに臨み、恋人(大海人皇子)の宮地なる三輪山を望見すれば、雲は山を掩うて山も見えない。感情の熾烈なる詩聖女王が、竝で堪へ難き懊悩を漏らさずに居られる訳がない。

……女王は真の恋人たる皇太弟に別るるをかなしみ、遙に三輪山を見て悲泣の声を呑んだ。現はにさうとも云ひかねての此の長歌は、一言一句悉く其の音底に燃ゆるが如き熱情を蔵め居るのである。(新釈 263 べ)

三輪山は大海人の宮地ではありません。遠ざかりゆく大和の、これがせんどの名残りです。その意味で大海人その人を象徴しました。

額田王には、三輪山に対して、単なる自然としてで無く、深い追憶、おそらくは大海人皇子へ奉仕時代の深い追憶をお持ちなのでは無からうか。その御悲しみが、大和をとこしへに見捨てて近江の新宮へ移住しようとし給ふ機会に触発したのではないか。(川田順氏女流歌人)

ちょっと補説します。——17・18 歌の動機は追憶ではありません。いましもいたましい悲劇のただ中に額田王は立たされているのです。その点を

田辺氏が次のように指摘してくれます。

一つの想像を許していただく。額田王はこの時、間違いなく天智天皇の後宮⑦に身を置いていたであろうが、その身が倭の京にある間は郷関にも程近く、或は時に大海人皇子と行き逢うぐらいのことはできたかも知れぬ。……行くを欲せぬ大津の地は、王の心の中で灰色に淀んでいる。そこでは、天智天皇の強権のみが憚なく発動され、自分のような弱い立場の者は、何一つなし得ないように考えられる。(初期万葉の世界)

17・18歌の悲痛を前にして思いおよぶところは、ほぼこのようなことしかありません。改めて、われ人に揚言したい。——作品そのものに聞くことに卑怯であってはならない、と。

額田王は遷都を境にして大海人を断念することを迫られていた、——このように考えられます。いうならば、三輪山歌は額田王が大海人を思いきらざるをえない瀬戸際だったと思われまます。

思えば、すでに長い間、この瞬間を覚悟していた額田王でした。すでに9歌において避け難き別れを身も世もなく泣きました。それは最初のせつばづまった悲嘆でした。⑧

泣かまくも慕ひこそ行けわが背子がい立たせりけむ蔽櫃が本(9歌 額田王)

(大意) ひとりになって泣きたいので慕っていくのです、いとしいあの方がお立ちになったという櫃の木のところへ。

以来10年近い間、最後の決断はつかないできました。つけずにいられないのが今度という今度です。「雲だにも」に絶望の深さが察せられます。

## 6

上述の見解に強く反論するのは谷馨氏です。17・18歌を額田王、19歌を井戸王の和歌と認めた上の反論です。

王のどの歌を採っても、悲恋による暗愁などは詠まれていないのである。(同氏「額田王」26ペ)

早速、再反論せざるにられません。額田王の7歌、8歌が明るいからといって、17・18歌が暗くはどのようにいけないのでしょうか？

一歌一歌の背景を尊重しましょう。それぞれが

生まれるべき背景を担っています。背景が異れば同一人の作品も変わります。7歌、8歌は喜悅の中に花咲きました。それらに続く9歌は、もはや血の涙にさいなまれています。波乱に生きた額田王に明暗二つの絶唱があっても不思議はないはずです。

それよりもまず、それらの説が別れを惜しむと臆測する対象人物たる大海人皇子にしてからが、大和京に残る筈がないのである。即ち遷都に当たっては、「留守官」を置いて、皇族諸卿群臣の大半が従う習いなのである。(同書同ペ)

本格的な遷都とあればその通りです。しかし、題詞に「近江国に下る」とあることを看過できません。

「いまだ近江へ遷都し給はぬ前、勅にまれ、私にまれ、ゆゑありて下らるるとて……」(古義)とする説もあるが従えない。(同書22ペ)「上る」でないのです。なぜ従えないのか、是非弁証があるべきです。それが聞かれず、古義説の補足を聞くばかりです。それは松田氏の一文です。⑨

「上」でなく「下」であり、「近江宮」「大津宮」でなく「近江国」であるから、遷都前であり、日本書紀はじめ公的に認めてゐないが、女帝である中皇命(倭姫)の時代で、まだ大和の後崗本宮にをられたが、その折、皇太子中大兄(天智)は新都造営のため近江国に滞在中だったのであるまいか。

おそらくその時、大海人皇子もまだ大和の後崗本宮に残ってをられたであろう。折しも額田王は皇太子中大兄に召され、井戸王を伴ひ近江へ下っていく。その途上でこの一連(17・18・19歌)が成立したのではあるまいか。(作者と作品)

全面的に賛同したい。ただ一点を除いては。それは、時の中皇命は間人皇后だったということです。

谷氏は次の点を反証としています。

第5句を「和我勢」で結ぶ歌に「右一首歌、今案不似和歌」といふ左注のあるのも、注者は、王の嘆きが皇弟を対象としたものでないことを認めたからに外ならぬ。かくて、皇弟

は王の惜別対象とはなり得ず、「三輪山」は山以外のものではない。(前掲書同べ)

谷氏は題詞を肯定して立論しました。論証の段階になって左注を基準に変えました。それは自家撞着です。19歌が「わが背」と和しているからこそ17・18歌は単なる山への惜別ではありえません。

三山歌に作者中大兄の心事を投入するのは俗解です。谷氏もその一人でした。

#### 中大兄の三山の歌 ㊦

香具山は敵傍雄々しと 耳梨と相争ひき 神代よりかくにあるらし いにしへも然にあれ  
こそ うつせみも つまを争ふらしき (13歌)

これは題詞通り「三山」を歌った客観的な詠歌です。17・18歌は身もだえんばかりな悲懷を吐露しています。もはや主観はおさえかね、あふれ出ています。おさえようとしているだけに、いたましいのです。谷氏はそれには耳をかさず、次のようにそぶきます。

遷都の一行が奈良山越えに際して、神たる三輪山の祭祀咒歌があって、天皇に代り額田王が詠進した。その緊張感がこの絶唱をなしたのだ。(前掲書による)

この見解には先蹤があります。折口氏です。

此は恐らく天智天皇近江遷都の途すがら、額田王が代作を命ぜられたものと思はれる。大和鎮護の三輪の神山に別れて行くといふ、なごり惜しみの歌である。(恋の座)

なお谷氏の19歌解は土屋氏私注に沿っていません。ここには概略にとどめます。——19歌は、行を共にした井戸王が自らの夫を思いやって詠じた。それがたまたま17・18歌と併載されたのは、ちょうど13・14歌に15歌が一括反歌として採録されたごとくである。

併載されただけの一歌について「即ち和ふる歌」と題すでしょうか？

これを要するに、谷氏は題詞を軽視し過ぎました。歌作品そのものには耳もかせませんでした。額田王の肉声などおよそ問題ではなかったのです。

#### 7

こんどは前向きに検討しましょう。

「和ふる歌」に考察を加えた筆頭も左千夫でした。

額田王が今大海人の皇子を恋悲しみ、三輪山を見るに事寄せて詠める歌に和して、女王恋悲しむのに同情したものに相違ない。女王の嘆くも無理はない。自分等にも野はりの衣につく如く、つき易く目につく我が背と、大海人の皇子も親しい人であるから、我が背と云ったのであらう。(新釈)

もの足らなさを禁じえませんが、そのように心の中で理解し、そうだそうだと自得している分には構わないけれど、悲嘆に暮れている当人に語りかけることにはなりません。次の場合も同様です。

額田の王の歌の陰に隠れてあるある男性を井戸王が美めて、額田の王の心を慰めたのであらうか。(武田氏新解・総釈)

「隠れてあるある男性」は大海人以外に考えられません。それは当然として、額田王は悲嘆を極めています。その時、井戸王が額田王の思い人をほめることが慰めとなるでしょうか？

この歌は、元来、額田の王の鬱々として慰まざる情を和げる意味があるのであらう……。同音を利用する技術は、歌では相当に発達してあるが、この歌では句の途中にこの手段を用いて、全体の音声を滑かに音楽的にしてある。その点が額田の王の心を浮き立たせようとしてある目的に適ってある。(武田氏皇室歌人)

そんなことで慰められる額田王の心情ではありません。

額田王を慰めて詠んだ歌と解したい。(佐々木氏評釈)

その論証を与える人はありません。断念した向ばかりが多いのです。そこを突破せねばなりません。

まことに「鬱々として慰まざる」は額田王その人です。大海人ゆえの懊悩悲嘆です。しかも大海人のオの字もないのです。おくびにも出さないとこのこと。出したくても出せなかったのです。

限りなき恋の悲痛を深く胸底に包みつつ、

現には泣くことも出来ない境遇に懊悩した時に、其の遺瀨なき思を僅に漏らされた歌が、即ち此の歌であるのだ。(左千夫新釈 17 歌注) 事情は 9 歌と全く一つです。ひときだずつ、ひときだずつ、額田王は大海人皇子の手中から切り離されつつあったのです。その事情は歌作品が想定を余儀なくさせる底のものです。

呼びかけても聞いてはくれないし、何を希求しても、何の効果もないことはわかっている。それにも拘らず、このような非情の山や雲にさえ呼びかけをするのは、胸中の鬱情がはけ口を求めてやまないからである。(岡崎義恵氏「万葉風の探究」呼びかけの歌)

額田王の思うところ、言いたかったところは大海人皇子です。いまはオの字も出せない。そのことが彼女を鬱結させている、——これは信じていいのです。17・18 歌の悲愴性はまさにこれです。出口を失っている心懐です。ただ悶々としているのです。いうならば、このままでは自爆作用を起こさずにおかないのです。

井戸王の和歌は時宜をえています。安全弁の役目を果たしたのです。額田王に代ってストレスの開放を行なったのです。

言に出でて言はばゆゆしみ山川のたぎつ心をせかへたりけり (1432)

周囲の情況が言表をさしひかえさせました。やがて鬱結がつのつたらたまりません。

こもり沼の下ゆ恋ふれば術をなみ妹が名のりつ忌むべきものを (2441)

……軽の市にわが立ち聞けば 玉櫛畝傍の山に 鳴く鳥の声も聞こえず 玉梓の道行く人も 一人だに似てし行かねば 術をなみ妹が名呼びて 袖そ振りつる (207 人麿)

言語に放出することがストレスのやり場です。それしかなくなるのです。それを井戸王が買って出たのです。

19 歌の表の意味は先にとりました。「わが背」は井戸王にも思い人です。ありていに言えば、大海人皇子その人です。

19 歌は確かに 17・18 歌にくっつきかねます。それは一見だけだと思うのです。井戸王は、まことにあからさまに、「よく目につくお方ですこと」と言い放ちました。それは意図的です。大海人をオ

クビにも出せない額田王に対置させたのです。対置がきわどいばかりに、「あなたが言いたくて、言いたくて、しかも言い出せないでいるのは『わが背』なのです」の代弁になっています。それは額田王の真意の暴露以外のなにもものでもありません。ただし、悪意のそれではない。もっとも勝義の善意だったのです。

はじめ 19 歌を井戸王の和歌と考え、後に改案した松田氏に次のような論述があります。

「わが背」を前稿で井戸王が額田王の心になっての表現としたが、無理な説明だったと反省してある。井戸王の名はここ以外になく、全く不明であるが、大海人皇子の妃でもない人が、額田王と如何に親しい間柄とはいへ、額田王を前にして「わが背」と呼び得るとは思へない。

井戸王も皇族関係ではあらうが、愛する人でも、妃でもなく、血族関係にもないのに、後に皇太子になり、即位もされる大海人皇子を「自爾都久和我勢」といふのは、やはり不自然であり、馴れ馴れし過ぎる表現といへよう。(前掲書)

愛する人でも、血族関係でもない、と断定される。その確証なしに。その時、次の「婦人」などはどういうことになるのでしょうか？

天皇崩時、婦人作歌一首 姓氏未詳

うつせみし神に堪へねば 離りゐて朝嘆く君  
放りゐてわが恋ふる君 玉ならば手にとり  
持ちて 衣ならば脱く時もなく わが恋ふる  
君そ きその夜 夢に見えつる (150 歌)

天智天皇の崩御を悼んだ一歌です。皇后倭姫皇后をはじめとし、額田王・舎人吉年・石川夫人らと共に哀悼歌を奏でています。もっとほかにも思い人、思われ人がいたはずです。

井戸王は大海人皇子をとりまく「そうした婦人方」の一人だったといたいのです。

## 8

おくればせながら一項を設けなければなりません。18 歌の「雲だにも」についてです。

助詞「だに」は、他の事はともかく、せめて、何々だけでも、と云った意味の場合に用ゐられる。(沢瀉氏注釈)



その通りです。それを主題歌にあてがえばどうなるでしょうか？

この場合は、「せめて雲だけでも……」という意で、言外には雲以外の人間に対する感情が働いていることを示している。(森脇氏解釈と鑑賞)

これが通解です。これに谷氏がきびしく反対をとなえました。

「雲だけなりとも」と歌った心は、自然物を非情と観じて、せめて今見る雲だけなりとも情あれかし——と興奮のあまり不可能に可能を要求したものと考へるのが、より自然ではあるまいか。即ち、一事に執して他を問題とせぬ強意の語法であり、敢えて判然たる対照物を設定する要がないのではあるまいか。それに、この反歌は長歌の心を更に繰返したものであるのに、長歌には雲に人を対させた気配が少しも無いのである。つまり、反歌は、長歌の心を更に鋭く歌い緊めるものであり、従って「だに」は強意に止まる。若し敢えて対照物を定めようとするれば、それは人に非ずして他の非情なる自然物であろう。3119・3454などの「今宵だに」の如きを見ても、今宵以外の宵に対して歌っており、昼に対せしめてはいない。(額田王 34 べ)

「だに」は単なる強意ではありません。例証に引かれた次の二歌にしても同様です。

あすよりは恋ひつつも行かむ今宵だに早く宵より紐解け吾妹 (3119)

庭に立つ麻で小衾こよひだに妻寄しこせね麻で小衾 (3454)

他の宵をあきらめて、「せめて今宵だけでも」と、最小限の可能を口にのぼせたのです。主題歌でいえば、「せめて今見る雲だけなりとも」と、最後の願いをここにかけています。それだけが期待をよせるに値したのです。他は排除するまでもなく、望むに値しなかったのです。

それにしても、谷氏に傾聴しなければなりません。「雲だに」の対照物に人間を拒否した点です。主題歌が一種の比喩歌であることは先に指摘しました。人間を持ち出すことは比喩と現実を混同させることなのです。

明確を期して図示します。

ア 三輪山……今見る雲…… (具象)

イ 大海人……天智天皇…… (想念)

通解はアとイを混交しています。念のため一例を引きます。

雲といふ自然物を他と比較し、本来情なきものにそれを要求してある所から、情あるべきものにそれのないことを暗示してあるものである。さうした者は王と関係の深い人でなくてはならない。(窪田氏評釈)

「王と関係の深い人」、それは端的に天智天皇です。と、ア・イ二つの系列が完全に混用されていることがわかります。

念のため添記します。「せめて雲だけなりとも……」と呼びかけた雲は、「雲というもの」一般でないのです。「今見る雲」であり、三輪山を隠しつつある雲です。これに比喩されている天智天皇はきわ立った二つの面をそなえています。一文を借用して指摘に代えたい。

彼を単純に一デスポットであるという「政治史」の概念で片づけて安心するならば、この時代の人間性ゆたかさ奇怪さを抹殺し抽象することで善良な道徳家になっていると恐らくいえそうだ。……政治家としての彼と、詩人としての彼とは通俗的・現象的には和解しがたい矛盾に見えるが、実は一の有機的共存であり、したがってその一方だけをきり離して論じたり、常識で両面を中和させたりするのは、正当であるまい。(西郷氏私記(→) 115 べ)

だれよりも額田王は天智天皇の非情・温情の二面に通じていたはずで、9歌以来の10年間、辛じて大海人の側にとどまれたのもこの温情に負っていました。しかし今度という今度は覚悟をせまられました。次の作品の世界へ推移していく転換点が主題歌に看取できます。主題歌の1、2年後、天智天皇を次のように思慕しているのです。

君待つとわが恋ひをればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く (488 額田王)

## 9

改めて17・18歌に立ち入ります。

17歌は三輪山を中心に18歌は雲を中心に歌っていましたが。前者は主題の三輪山を思いきり大映しにしました。雲は邪魔を入れるべきものでない

こととして歌われています。18歌になると、邪魔すべきでない雲がひどく気にされてきます。「雲」を前面にすえて、厳しい口調で畳みかけています。そんなに邪魔するのか(しかも隠すか)、と、いふかり、そんなことをすべきでないことをお前ばかりはわかって欲しい、と懇望し、哀訴し、「隠さふべしや」と抗議し、難詰しています。

長歌のしめやかに静かであったのとは異って、遽かに鋭さを現し来って、長歌以上に抒情気分を現したものである。叙事的なものを抒情的に、平面的なものを立体的にしてゐるところ、長歌と短歌の特色を示してゐる。(窪田氏評釈)⑩

長歌も叙事的・平面的ではありません。抒情の限りをつくしています。反歌はその限度を突破し、絶叫に近づいています。二つは表裏です。

予の見る処では、此の反歌は無くもがなの感がある。長歌ですでに十分である。多く云はない処に余韻が籠る質の歌であるから、長歌だけにして置く方が奥ゆかしいのである。此の長歌の如き極めて真面目な精神の籠ってゐる歌に、少しでも云ひ過しては、実意が減るのである。「心無く雲の隠さふべしや」とつつましやかに云ひ留めて置く処に奥ゆかしい味ひがあるのを、反歌の如くに、「三輪山を然も隠すか」既に才走った詞つきである。「雲だにも心あらなむ」愈才走って居る。長歌に寄せた同情が反歌になって大いに減じた。どうしても此の反歌は無い方がよい。(左千夫新釈)

「奥ゆかしい味ひ」とどまった歌評は左千夫らしくない。反歌まで来ないでいられない額田王だったのです。才走ってなどいません。やむにやまれぬ叫びです。絶叫なのです。

「雲だにも心あらなむ隠さふべしや」——人間本能のさながらの声の如き此の力強い表現は、人麿の「妹が門見む靡けこの山」といふ、あらゆる情熱の昂揚を吐き尽した表白にも比肩し得べく、全生命の絶叫の声であるのである。(伍藤信綱氏詩精神と文化)

人麿に匹敵する？ いや、もっと純粹です。心底の声です。人麿には誇張があり、思いあがったいやみがあります。その意味で、次の評言を選び

ます。

「雲だにも心あらなむ隠さふべしや」の二句を取って見ただけでも、なほ人麿の「妹が門見む靡けこの山」にも匹敵するといふよりは、それに先行して、しかも凌駕して居るとさへ思はれる。(土屋氏私注)

その烈しさは、自然物への惜別や怨嗟ではない。鎮魂の咒歌といったものではましてない。心底から燃え上がる叫びです。それは自然を通して現実世界へ響き返る悲鳴です。

## 10

一通り述べ終え、も一度出発点に立ち返ります。

題詞に導かれて一歌一歌の肉声を聞くべく方針を立てました。ほぼ所期の目的を達しえたかと考えます。

(一) 題詞を否定することはしない。

(二) 17・18歌は額田王が三輪山に惜別の限りを尽くした。それは別れ難い人——大海人皇子への、精一ばいの惜別だった。

(三) 19歌は同輩の井戸王が17・18歌に和し、額田王の鬱結を解毒した一歌だ。

この見解がもし当を得ていなかったとしても——提唱者の責任において当をえていないとは思わないのですが、その時でさえ、みだりに題詞を捨てて左注につくべきではありません。まして、左注をさえ捨てて、——たとえば17・18歌を別な作者に帰属させるなど、もっての外の臆説です。左注はそれを認容していません。作品そのものは、まして許容するものではありません。要するに、題詞をなみした諸注は独断だったのです。

17・18歌と19歌が相関的なことは大前提です。19歌に「わが背」とあることは17・18歌が人事歌であることを示唆します。げに、17・18歌は熱っぽい。考えてもみていただきたい。こんなに全精魂を打ちこんで人間世界の惜別を奏でた作者が、作品が、ほかにあるでしょうか？

人間臭さをきらい、咒性を心掛けたのは谷氏でした。その所説の限界は19歌を和歌と認めないところにあるのです。その文中に次の一節が目につきます。

留守官を背に持つ井戸王が、同じ境遇にある女官達の別離の悲情を代弁し、以って鬱情

を霽さんとした、これ亦時に応じた作歌と解し得られる……。 (同氏額田王 36 べ)

だれよりも鬱結していたのが額田王だったので。ただ遠まわしにしか物がいいない、やるせない額田王です。その時、19 歌は最も「時に応じた作歌」であり、まさしく額田王への「和歌」だったのです。

#### 注

① 左千夫新釈・精考・新講新版・金子氏評釈・峯岸氏口訳・佳調、同解。

② ここが次のように不正確になっています。

眺めようとするその山を(「隠さふべしや」の目的語)左千夫新釈・全釈・豊田氏新釈・佐伯氏評解・大久保氏新釈・森脇氏解釈と鑑賞。

これは対を無視しています。

ちっと目を放けないで、幾度もふりかへって、遙に眺望しようと思つてゐる山をば、(折口氏口訳)

見てゆこうと思う、しばしば眺めやろうと思う、その山を…… (大系)三省堂古典学習シリーズ、同考。

これらは「見つつゆかむを」までも軽視にでました。

行かうものを、望みみようとするものを(総釈)全釈・創元社講座木俣氏説・私注、同考。

これは「見放けむ山を」の「山」を無視したのです。無視してよければ問題は最初からなかったのです。

③ 「三輪山は」と解した諸家の「山を」の理解は次のようです。

山である。正訓

山であるのに 精考・金子氏評釈

山をば 森脇氏前掲書・佐伯氏評解

④ この箇所はいまだ公認されていませんが、次の一つが正解者です。(拙著「省察」(一)参照)

吉田増蔵氏「万葉集の長歌を漢文修辭法より観たる一斑」(万葉集論纂所収)

⑤ 同氏の同解が次の論稿にも見られます。

「綜麻形」の訓に関する一提案(考叢所収)

⑥ 大海人皇子との連関において注解する諸家を列挙します。本稿に引用する以外に限ります。

赤彦鑑賞及び其批評・川田氏女流歌人・春陽堂万葉集講座(一)金子薫園氏額田王・同書今井邦子氏額田女王研究・中村憲吉氏万葉集の研究・短歌講座(六)花田氏額田女王歌評釈・都築氏万葉集十三人・太田水穂氏和歌史論上代篇・大成(九)尾山氏説・高安国世氏万葉の歌をたずねて

⑦ 朝廷の宴席に侍して応詔した 16 歌の存在がこの推定を裏づけていると思われれます。

⑧ 第 9 歌は古来の最難訓歌です。詳述する余裕がない

ので拙著「省察」(一)の参照を願うことにします。そこに訓釈にまつわる一切をかなり詳しく述べておきました。

なお、10 年間の経過は間人皇女(孝徳天皇の皇后)との連関において考えるべきだと思います。

9 歌が歌われたのは斉明 4 年です。その前から、当時も、その後も、斉明天皇・中大兄・間人皇女の三人は水入らずの月日を送っています。その間、額田王にお声掛りが延期の形でした。

斉明 7 年、天皇崩御。天智 4 年、間人皇女薨去。同 6 年 2 月、斉明天皇と間人皇女を合葬。その 3 月に遷都の段どりになります。額田王の近江下向はそのやや前だったと思われれます。こんどこそ天皇のお召しは避けられない状況だったのです。(本紀要通巻 10 号の拙稿参照)

⑨ 次の推定をとりたいたとは思いません。

額田王が近江の国に下られたのは、多分近江の大津に帝都が遷され、そこにましました天智天皇に召されたのであらう。その途中、奈良山で、故郷を望み見て詠まれた歌と解せられる。もし然りとすれば、近江の国に上ると書かねばならないのに「下る」と書いたのは、この歌を記し留めた人々に、大和を中心とする思想があつて、かやうに書いたのであらう。(全注釈)

⑩ 三山歌については「省察」(一)の詳論を参看願いたい。窪田氏は同じ文中で次のように述べています。

古里に対して名残を惜しまれる心である。今は、古里のすべてを三輪山に託して、それによって古里を現してゐる。

表面上のも一つ奥のものを讀もうとしていません。その結果が次のようになります。

古里を代表する物として一つの山を捉へ、その山を隠す雲に恨みを託すといふ方法は、文芸的なものである。一方では実感を尽し、同時に一方では文芸的にし、双方を渾融させたものとしてゐるのは、王の詩才の非凡を示してゐるとすべきである。

窪田氏はしばしば「文芸的」を愛用しています。称揚なのか、軽視なのかにとまどわされることが常でした。ここで確認します。必ずしも軽視ではない。いや、称辞であらう。ただし、そうした評価そのものを僕は再評価しないではられません。